

## 第一章 隠野の人々

1.

そして、七月後半。夏休み前の最後の登校日。

制服のブラウスに着替えた伊吹は、今日も畳敷きの広い居間で、家族と共に朝食を摂っている。長い座卓には紅葉の他にも、祖父、祖母、伯父、義伯母、従姉妹にお手伝いさんと、大勢が着いている。全員いつも通り、黙って口を動かしていた。叔母だけはまだ起きてこない。

目の前には、湯気の上がる白米に味噌汁、キュウリの漬け物、卵に海苔、アジの開きまでがずらずらと並んでいた。毎朝おおむね同じメニューである。東京にいた頃には、バナナ味のゼリーだけ口に入れて学校に行っていたというのに。おかげで伊吹は、いつも半分以上を残していた。

口をへの字の形にして伊吹は言う。

「祐理名さん。私は食べられないと言ったのだが」

「……」

何度お願いしても、無口なお手伝いの祐理名さんは、一切言うことを聞いてくれない。山のようにご飯を盛る。曾祖母の厳命で、尾津野家の子どもたちには、たらふく食べさせることになっているらしいのだ。

諦めた伊吹は、ちまちまと朝食を口に運んだ。美味しいけれど、食欲は起きない。

「……伊吹。今日は、何時に帰ってくるんだ」

伊吹と紅葉の祖父である賀茂寺の住職、三弥和尚が重い口を開いた。今年で七十三になる禿頭の老人だが、僧侶とは思えないほどの頑固さで未だに一家十人を取り仕切っている。毎朝、家族全員の一日の予定を尋ねてくるのである。伊吹はやれやれとうつぶきながら答えた。

「分からない。友人と会って話す予定があるのだ」

「分からないとはどういうことだ！ みわもほたるも、毎日時刻通り帰ってくるというのに、お前だけはいつまで経っても決まった時間に帰って来ん！ どうなつとるんだ！」

「実際にその時にならないと、何時に帰れるかなど分かるわけがないだろ

う。それに携帯も持っているし、夕食までには必ず戻る。別にいいではないか」

「そういう問題じゃあない！ それに、また敬語がなつとらん！ 年長者には言葉遣いを気を付けなさい！ アメリカ育ちだか何だか知らんが、この寺に来たからには礼儀と作法というものをこのワシがきちんと叩き込んで」

「ごちそうさま」

祖父の大声を聞き流すと、伊吹はしれっと立ち上がって、部屋の隅の鞆を手に取った。

今日は高校も最終日なので、集会と成績表渡しだけで実質午前中には終わってしまう。しかしその後、吉野たちとだらだら過ごすことになるだろうし、更にはその後は、喫茶店に集まって話したりするかも知れない。だったら何時に帰るかなんて、約束できるわけもない。

「コラ待て伊吹！ 待ちなさい」

「このままだと遅刻するのだ……ん？」

祖父を無視してそのまま登校しようとしたとき、ふと伊吹は、居間のテレビで流れている朝のニュースに目を向けた。緊張した面持ちで、アナウンサーが原稿を読み上げていた。

「……五月から\*\*県こくりの市を中心に発生している連続殺人事件について、県警本部は住民に対し、注意を呼びかけると共に、警察官三百人体制で警戒を行っています。この事件は今年五月十六日、同市の中学二年生の男子生徒が、市内で何者かに首を刃物で切断された状態で発見され、その後六月中に二件、同一犯によると見られる犯行が連続して発生しているもので、県警本部では継続して捜査を行っていますが、まだ犯人の目星は付いていません。これについて県警本部では、警察庁に捜査員の増員を要請し……」

伊吹は顔を顰める。高校でもずっと話題に上っている事件だった。

近所の学校に通う中学生が連続して殺され、全国放送で報道されているのである。先月に至っては、十九歳の女性までもが被害に遭っているのだ。週刊誌では「山奥の片田舎で起きた、連続猟奇殺人！」と煽られているし、ワイドショーでも毎日のように大々的に取り上げられているようだった。

学校内でも緊急集会が開かれ、夏休み中の外出についても、教師から厳しく指導が繰り返されていた。町中を巡回している警官の姿もよく見かけた。すると祖父の隣で、祖母の翠が、静かに言った。

「爺ちゃんがうるさいのは分かるけども。こういう事件も起きとるんやから、伊吹、氣いつけて、早よう帰っておいな」

「……分かった」

伊吹は小さく頷き、居間を足早に出て行った。今日も、朝食は半分以上残してしまった。

「あ、ちよ、ちよと待って！ お姉ちゃん、お弁当忘れてる！」

伊吹が玄関先まで来たところで、エプロン姿の妹が、慌てた声で後を追いかけてくる。紅葉は毎朝、家族全員の分の弁当を作っているのである。靴を履いた伊吹はため息を吐くと、振り返った。

「なんだ紅葉。いらないと昨日言っただろう。『るーじゅ』で適当に食べる」

眼をぱちくりさせる紅葉に向かって、伊吹は口を尖らせてそう言った。『るーじゅ』というのは、市内唯一の喫茶店兼レストランの名前である。

それを聞くと、紅葉の大きな目がみるみるうるんでいく。伊吹は苦い顔になった。

震えた声の紅葉は、今にも涙をこぼしそうになりながら言った。

「あ、あの、お姉ちゃん、ゴメンな。もみぢちよつと、忘れとって。やつたらこれ、いらんよな……これ、あとでもみぢが食べ……」

「いい！ いいから渡しなさい。食べるから」

びくびくしながら引っ込んでいこうとする紅葉の手から、伊吹は弁当箱を奪い取る。十六にもなっただけ泣き出すから困る。しかも、自分と同じ顔なのだから、余計に始末が悪い。

「みわとほたるも、もう出ないと間に合わないだろう。私はいいから、急かしてきなさい」

「ウン分かった。ありがとうな、お姉ちゃん。お姉ちゃんはやっぱり優しいな」

にっこり笑った妹の言葉にムツとしてから、伊吹は弁当箱を靴に突っ込み、乱暴に玄関戸を開けて出て行った。庭に停めてある自転車にまたがり、

勢いよくペダルを踏み込む。山にほど近い賀茂寺から海沿いの鍛冶高校までは、十五分ほどかかるのである。

蒼い草木が生い茂り、すぐそばに澄んだ川が流れる田舎道を、短い髪を風になびかせながら伊吹は走り抜けていった。

2.

「んで！ 夏休みの計画なんやけど！」

伊吹が教室に入って席に着くなり、真正面の席の安達紺が話しかけてくる。

「いぶちゃんはどうすんの？ 花火大会行く？ 海で泳ぐ？ 意表を突いて爺ちゃんと山で修行？ 似合いそやな」

「家で読まなきゃいけない専門書や論文が溜まっているから、それを処理しつつ過ごす予定だ」

「何やそれ、休みの間も仕事押しつけられてるダメリーマンみたいやな」  
そう言って、紺はケラケラ笑っている。

髪は二つ結び、陸上部だけあって、まだ七月だというのに肌は真っ黒だった。どこから見ても陽気と元気の塊でしかない太陽のような彼女が、なぜ自分のような暗い理系女子と転校初日から友達になろうとしたのか、伊吹はいまだにサッパリ理解できない。ちなみに彼女の最初の一言は、「オデコ広くてかわいいなアンタ」だった。余計なお世話である。

紺は得意げな表情で、とうとうと語った。

「そらな、いぶちゃんは天才かも分からん。ホンマやったらアメリカの大学で、ウチなんかと一切関係ないスウガクやらブツリガクやらの勉強をせんならんのかも知らん。成績も、何にも勉強してないのに学年一位や。せやけどな、同時に花の十六歳女子高生でもあるんやで。これは素晴らしいことや。成績表とか成績表とか成績表などという愚かしい物事に縛られることなく、翼を大きく羽ばたかせるべきではなかるーかこれ」

「紺、お前なにか現実逃避してるだろう」

「ま、ええわ。とにかく夏一杯、ウチが無理矢理連れ回したるからな。覚悟しとき。なー吉野、澄ちゃん、二人はどうすんの？ ウチ隠野川でキ

ヤンプとかしよかと思うんやけどー」

紺が大声でそう呼ぶと、教室の後ろで話していた男子二人が近づいてきた。

一人は短髪の一見して野球部と分かる背の高い少年であり、もう一人は対照的に、どことなく女の子めいた風貌の、清潔な雰囲気の子である。

女の子めいている方の頭鬼澄哉が、女の子のような声で言った。

「うん……でもその、キャンブは蚊に喰われるし、日焼けするし、僕はちよつと……」

「なに言うてんの。ほんなん言うたらずつと家の中おらなアカンやないの」  
「俺も部活の練習あつからな。わざわざ休みの間まで外でウロウロしたくねーよな」

頭をかきながら吉野秀一も言う。こざっぱりとした顔立ちで笑顔を絶やさず、女子からの人気も高い少女マンガの登場人物のような彼が、なぜこんな脈絡のない四人組の中に加わって仲良くしているのか、伊吹はこれも、不思議でならなかった。

おもむろに吉野は、伊吹の方を向いて言う。

「尾津野はどうだ？ 何かみんなでやれるようなことあるか？ 付き合おうけど」

「そうだな、なら……ペンローズの量子論からの意識へのアプローチと、それに対するホーキングの反論について検討した後、ディスカッションするというのはどうか」

すると、全員が沈黙した。かなり簡単に軟派な案を示したつもりだったのに、これでも却下されてしまうのでは伊吹もどうしたらよいのか分からない。

大体、物理学者志望の少女に元気印の娘、根っからのスポーツマンに気弱でフェミニンな美少年という四人で、共通する興味なんかあるわけがないのだ。

そもそも伊吹としては、日本の高校で友人を作るつもりはなかった。数年後にはハーヴァード大の物理学部へ入るつもりだったし、東京では高IQ児のための特別教育校に通っていた。この町に来たのも両親の勝手都合に過ぎず、不満だらけだ。今のうちに勉強しなければならぬことは山

積みである。

それなのに、四月の頭から紺がまとわりついてきてあちこち遊びに振り回されるし、全く興味のないのに吉野の試合の応援へ行く羽目になるし、澄哉は澄哉で二人きりになるとファッションやメイクについて大まじめに講義してくる。おかげでろくに本も読めていないのだ。

正直言つて迷惑だったし、「正直言つて迷惑だ」と何度も紺には伝えてある。しかし、全く通じていない。仕方がないので、振り回されるままに振り回されている状態だった。

「せやけど、澄ちやんはまたファッションの話とかしたいんやろ？ そしたら吉野が寝るし。どしたらええのかなー。やっぱり浴衣で花火大会？」

「……じゃあ、鬼のことについて調べる、っていうのはどうだ？」

唐突に吉野が飄々とした声でそんなことを言い出したので、伊吹は顔を上げて、眉間に皺を寄せた。

——鬼？

紺も、怪訝な表情で尋ねる。

「はあ？ 何やそれ。何で今さら鬼のことなんか調べなアカンの？」

「別にいいだろ。俺の趣味だよ。俺、昔から鬼とか妖怪とか、民俗学っていうの？ そういうの割と好きなんだ。尾津野が転入してきた頃も俺、そんな話してただろ？ で、前からいっぺんがつつり調べたいなーって思つてて、ちようどいいかなって」

「どこがちようどええの。そんな小学校とかでさんざんやったやん。『ふるさとのおかしばなし』とかで。十六にもなってお化けの話なんかしたないわ」

「だからさ。安達は、みんなで一緒に過ごしたいんだろ？ でも澄哉は外に出たくない。で、尾津野は調べ物とか考え事とかして議論をしたい。全員趣味はバラバラだ。だったら鬼のことについて調べて、話し合ったらいいじゃん。尾津野ってまだ、隠野（かくの）の鬼についてそんなに知らないだろ？」

「興味ないしどうでもいいし、鬼なんかいない」

「だからこそ調べたらいいんだよ。せっかくこんな町に越してきたんだか

ら、色々覚えていった方がいいじゃん。将来アメリカに行ったときに日本文化の紹介とか出来るし。それに、鬼なんかいないって言うんだったら、俺とそれこそディスカッションしたらいいだろ？ 俺は、きつとどつかに  
いる派。尾津野はいない派。澄哉と安達は どうする？」

「えー……僕は、いない、かな。ずつとこの町に住んでて、鬼とか怖いし、苦手だから……伊吹ちゃんに、いないって証拠を教えてもらいたいな」

「お前、名字が頭鬼だろ？」

苦笑する吉野に突っ込まれると、澄哉はそういう問題じゃないんだよー、と手足をバタバタさせる。元々小柄で愛くるしい容姿なので、そんな振る舞いがよく似合った。

机に肘をついた紺が、やる気なさげに言った。

「ほんなら、ウチはおる方でええわ。うちのお父ちゃんなんかもおるって昔から言うてるし。ま、どっちでもええんやけどな」

「よっしちようど二対二だな。これでチーム分けして、証拠とか探して、相手チームを論破したらいいじゃん。そんな本気になって調べなくても、他の用事の合間合間で気が向いたらぐらいでいいから。で、適当に目を見計らって、みんなが集まって遊んで、ついでに鬼のことについて話す。安達、これでいいだろ？」

「まあ……ええかな。いぶちゃんのため、ってことで。要するに、鬼の話をダシにしてちよいちよい集まって遊ぼ、ちちゅう話やる？ 夏休みのテーマが『鬼』っていうか。何か、イヤやけど」

「なんだよー。ちよつとぐらい目標とかあった方が、遊んでたって楽しいって。な、尾津野もそれでいいだろ？ 賀茂寺の娘なんだからさ、それぐらい知っておかないと。『スクナ様』の話とか、ちゃんと憶えたのか？」

地元の三人組がどんな話を進めていく。教室で普通に「鬼」の話をしていても、何の違和感も覚えないらしかった。周囲の同級生たちも、誰も気にしていない。「スクナ様」というのは、賀茂寺でもお祀りしている神様だか鬼だかで、こくの隠野で知らない人はいない。

一方、そんなファンタジーワードに全くなじみのない伊吹は、口を挟む余地もなかった。今回も、彼らに従うしかないのだろう。伊吹は心の中で、ため息をつく。どうして鬼なんてものを、調べなければならないのか。

とはいえ伊吹としても、興味が無いわけではなかった。

春の山中で見た、あの奇妙な腕の幻影を思い出す。

——真つ黒な、生き物の腕。

「鬼か……」

そつと呟いて、伊吹は考え込んだ。

\*

ここ、\*\*県こくりの市は昔から、鬼にまつわる伝承で知られる地であった。

土地は三方が深い山々に囲まれ、一方が海に接している、自然豊かな場所である。市自体は最近の町村合併ブームで新しく出来た自治体なのだが、それ以前、隠野町こくのという陰気くさい名の町だった頃、そして更に遡って隠野村と呼ばれていた頃から、土地のあちこちに奇怪な鬼の伝説が残されていた。鬼の足跡、鬼の現れた橋、鬼を奉った石碑、そして山に隠れ住むとされる大きな鬼神おにがみと、およそ鬼と関わりのない言い伝えが見あたらぬほどである。澄哉の家、頭鬼家のように、「鬼」と名のつく旧家もいくつかあった。

鬼といっても、絵本に出てくるような赤い身体に虎柄の下穿きのキヤラクターではない。伝わっているのはどれも、グロテスクな異形の化け物ばかりである。民俗学者の間で隠野は評判が高く、有名な学者が何人も聞き取り調査に來たり、中には家を建てて住み着く人までいた。

しかし一方で、一般人にはウケが悪い。市としては合併を機に、何とかこの無数の鬼をキヤラ化して町おこしに役立てようと狙っていたのだが、いかんせん話が残忍非道に過ぎるため、観光案内などには載せられず、結局イラストと着ぐるみだけをいくつか作って、どちらも倉庫で埃を被ったままになっている。

とはいうものの、小さい頃からこの町に住む子どもたちは、何度も祖母から聞かされて鬼の物語に慣れ親しんでいる。小学校の頃から郷土史を学んでいるし、だからこうして友達と鬼のことについて話していても、何の疑問も感じないのである。中には吉野のように、ひよっとしたら鬼は今



でもどこかにいるんじゃないか、と疑っている者もいる。そして伊吹は、越してきて三ヶ月が経っても——いまだにそういうノリに慣れない。

\*

「尾津野の家なんか、鬼を使って戦った陰陽師の弟子の、末裔かなんかなんだろ？」

唐突に吉野からそう問われて、ハア？と伊吹は裏返った声を上げた。すると、紺が喜んで乗ってくる。

「え、そうなん？ 賀茂寺って鬼と関係あるって聞いてたけど、そんなすごいとこやったんや。めっちゃカッコイイやん」

「いや、ちよつと待つんだ。別にそんな大したものじゃないだろう。祖父が何かそんなことを言っていたような気はするが……よく知らない。仮にそうだとしても、それはただのお話だ。私とは、まるで関係ない」

「鬼と戦う、じゃなくて、鬼を使って戦う、なの？」

澄哉が純真な目をして尋ねる。すると、どうやら本当にこの手の話が好きならしい吉野が、伊吹を無視して嬉しそうに答えた。

「らしいぜ。鬼を自由自在に使役したっていう、えーと、エンノ何とかっていう人」

「大事などこから忘れてくんなアンタ」

紺は半目でジトリと吉野を睨む。それから彼女は、伊吹の方へ向き直って言った。

「でもすごいなーいぶちゃん。そんな名家の生まれやなんて。もつと話聞かせてーな」

「いやだから私は……」

「すごいよね。僕もおばあちゃんに賀茂寺さんの話、聞いたことある。僕の家なんて、あんまりいい言い伝えないから……伊吹ちゃんのおじいちゃんに、お話聞けないかな」

「お、それいいな！」

澄哉の提案で上機嫌になった吉野が、手を叩いて言った。

「手近で手っ取り早いしな。じゃーとりあえず、尾津野の家に行つて、住職さんの話聞く、と。ついでに紅葉とも遊ぼうぜ。んで、あとさ、俺この町に住んでる有名な民俗学者一人知ってるんだよ。もう引退してヒマで、町とかブラブラしてるから、話ぐらいなら聞けるかもしれないな。そこから責めてみることにしようぜ。尾津野もいいよな？　じゃ、また放課後、『るーじゅ』で、夏の計画詰めるか」

紺と澄哉が領いたところでちょうどチャイムが鳴り響き、教室前のドアから担任が入ってきた。吉野と澄哉は、慌てて自分の席へと戻っていく。伊吹がオイちよつと待てお前たち、と言おうとすると、きりーつ、という学級委員の声が聞こえて、全員が席を立った。

伊吹は一人、ガックリと肩を落とした。

### 3.

「お姉ちゃんお帰り。案外早かつたなあ」

夕暮れ時になり、自転車を押しながら伊吹が寺に帰ると、庭木に水をやっていた紅葉が元気に手を振っていた。広い境内のあちこちに樹木が植えられているため、その世話も紅葉の仕事なのである。義理の叔母である梨音も、紅葉の隣で、いつも通りの茶髪にエプロン姿のまま、水まきをしていた。一家十人を支える家事のほとんどは、この二人と、お手伝いの祐理名さんだけで請け負っているのである。

砂利道をニコニコ顔で近寄ってきた紅葉に、伊吹は尋ねた。

「……紅葉。祖父に寺の由来を聞いたらどれぐらいかかる」

「四時間はいくなあ」

「そうか……」

明日は地獄だということが確定した。さらに伊吹は尋ねる。

「明日、祖父が猛烈に忙しいということはないか。死人が二十人出たとか」

「おじいちゃんしばらくヒマやて言うてたよ」

今日中に殺人事件を起こすとか墓石でドミノ倒しをするとかしない限り、明日の祖父の長時間トークからは逃れられそうにない。伊吹は諦めて、噂の猟奇殺人犯の活躍に期待することにした。そしてとりあえず明日のと

ころは、吉野たちの決めた予定に従うことにする。

四人が集まった放課後の喫茶『るーじゅ』では、夏一杯のざっくりとしたスケジュールが決まったのだ。明日は、朝イチで賀茂寺に来て住職である三弥和尚の話聞き、午後からは、鬼に詳しい民俗学者に会いに行く。その後は、一週おきぐらいで集まって研究成果を語り合い、他の鬼にまつわる旧跡を廻っていく。まあ、これぐらいならそれほど負担にならないし、日本の民俗を学ぶという意味でも悪くないだろう。

そう伝えると、紅葉は両手を合わせて満面の笑顔になった。

「えー！ 明日吉野くんや紺ちゃん来るのー？」

「ああ。残念ながら」

「嬉しー！ もう四ヶ月ぶりぐらいやーん！ みんな変わってないかなー」  
「変わってないだろう。お前だって何の変化もないのだから」

すると紅葉はふくれ面になった。紅葉は吉野たちと中学で同級生だったので、もちろん面識がある。紅葉はその後進学しなかったため、三月までみんなとはお別れになったのだが、四月になった途端、まるきり同じ顔をした冷たい伊吹が高校へ転入してきたせいで、しばらく学校中が騒然としたものだった。

テンションの上がった紅葉は、わくわくした表情で話し続ける。

「何用意したらええかなー。おかきとかしかないんやけど」

「疲れ果ててるだろうから甘い物でも出してやってくれ。ああ、あとそれから明日は、夕方から向井坂むかいさかに本を買いに行くから遅くなる。夕飯は要らないから」

あっさりそう告げた伊吹に、紅葉はえーお姉ちゃんアカンよー、と口を尖らせている。しかし伊吹としては、朝から何時間も祖父の話聞く上に、夜も顔をつきあわせて食事を摂るなんてまっぴらごめんだった。大家族の中にいると、たまには一人で過ごす時間が欲しくなる。適当に手を振ってごまかしながら、伊吹は自転車を押して、その場から立ち去ろうとした。

その時、ふと思いついたように紅葉が言った。

「あ、そや…お母さんから電話あったよ」

その言葉を聞いて伊吹は立ち止まり、それから振り返って、小さく息を吐いた。

「……何て言ってた」

「もうしばらく、お父さんとの話し合い、時間かかるって。来月中には何とかこっちに来れるようにしたいって」

「……そうか」

母も仕事が忙しく、また引くということを知らない人間であるため、父との離婚の調停は一向に進んでいない様子だった。紅葉はぼつりと呟いた。

「もみじもいっぺん、お父さんと会ってみたいんやけどな……」

「その話はまた今度だ」

伊吹が早口に応えようと、紅葉は大人しく頷いた。

そして伊吹は、また自転車を押して、裏の物置へと歩いていった。そつとため息を吐く。

ふと気づくと、先程まですぐそこにいたはずの義叔母の梨音は、庭からいなくなっていた。彼女は叔父、匠雄しやうゆうの嫁であり、従姉妹のみわ、ほたるの母親である。この寺に越してきて四ヶ月あまりになるが、伊吹は彼女と会話した記憶が、ほとんどなかった。目を合わせた憶えすらない。たぶん彼女には、嫌われているのだろう、と思っている。

大家族の中で暮らしていると、色々あるのだ。

夕食を終えると、やっと部屋で一人になれる。本当は紅葉と二人で使っている部屋なのだが、今紅葉は洗い物や片付けに忙しいので、実質寝る前まで独占できるのである。妹が使わなくなったためもらい受けた古い勉強机の上には、伊吹のラップトップPCと趣味で買ったデジタルガジェット、それから、洋書の専門書に論文が山積みになっていた。畳敷きのこの部屋には全く似合わない。

『大丈夫？ E V E』

ヘッドフォンに突然そんな声が聞こえたので、伊吹は我に返った。ディスプレイの中では米国の友人のエレーナが首を傾げている。イヴというのは伊吹のあだ名である。さっきからSNS上で、彼女とビデオチャットをしているところだった。気もなく伊吹は応える。

「ああ、まあ、大丈夫だ、たぶん」

『たぶんって何よ』

「実は今自分が何をしてるのかあまり把握していない」

別に冗談でもなかった。三月末、東京からこちらへ越してきて以来、自分というものがさっぱり見えなくなっている気がしていた。自分が何をしているのか、何をしたいのか、どう生きたいのか。先が見えない。歩むべき道が見えない。周りにいたらだと流されるだけで時間が過ぎていく。あれだけやりたかったはずの物理学の勉強すらろくに手に付かず、気づいたらもう七月である。東京か、出来ればアメリカに帰りたかった。日本の田舎は、主體的に生きるのには向いていない。

しかし大して心配している様子でもなく、エレーナは目をキラキラさせて話を続ける。

『それでね、イヴ、クリフのことなんだけどー』

「クリフとは誰だ？」

『だから、あたしの新しいボーイフレンドだつて！ もうね、毎日がジュージツしてるんだから』

「そうかよかったな」

『意味分かってる？ ジュージツしてるの』

エレーナは、ふふん、と言う声が聞こえてきそうなほど得意げな笑みを浮かべている。さぞかし気持ちよくキスしているのだろうな、と伊吹は思った。それから、訝しげに尋ねた。

「……ところでお前、数学はどうしたのだ？ 数学オリンピックには出るのだろうか？」

『ん？』

「国際数学オリンピック。高校生になったら出るって、小<sup>エレメンタリー・スクール</sup>学 校の頃から憧れてたじゃないか。ちゃんと準備はしているのか。当然予選は通っただろうが」

伊吹は半ばあきれ顔で言う。これでもエレーナは、保育所にいた頃から微積分を暗算でこなし、小学二年生の時にはいくつかの方程式に新しい解法を見つけ出した数学の神童として、アメリカでも雑誌の取材をしばしば受けるほど、よく知られていたのだ。伊吹も同じぐらいのことが優に出来るため、ずっと親友として付き合ってきた。

するとエレーナは、腕組みをして考え込むポーズを取り、こう答えた。

『数学はねー……しばらく、お休みしようかと思ってさー』

「はあ？ 何を言っているのだお前。お前から数学を取ったら何が残る」

『色々残るわよ。夢、希望、将来性、セクシーなスタイル。伊吹も少しは成長した〜？』

「う、うるさいな！」

『まあ何でもいいんだけど。あのねイヴ。あたしはある日気づいたの。いつの間にか、あたしが数学を捉えるキャプチャーんじゃなく、数学があたしを捕らえるキャッチャーようになっていたって。分かる？ 元々あたしは自分で選択して数学を学んでいこうとしていたのに、あたしの方が数学に規定されてしまっていたのよ。本末転倒だと思わない？ もっと言えば……本来物事を把握するための論理的思考によって、あたしたち人間が逆に縛られてしまっているわけ』

「……まあ、発想としては分かる」

「でしよう？ ただの枠、ただの足枷にしかなくていいのよ。それって単なる不自由だわ。だからあたしは、いったん数学から離れようと思ったの。面白いと思わない？」

そう言っつて、エレーナはにっこり笑う。頭脳のキレは相変わらず衰えていないようで、一応伊吹は安心した。けれど伊吹としては、あまり頷きたくない結論だった。

「で。私にどうしろと言うのだ」

「べっつにー。これはただのあたしの結論。真似しろなんて言わないわ。イヴがジュージツしてるところとか、想像つかないし。好きにしたらいいんじゃないの？ 今のまま理論物理学者目指して勉強に励むのもよし、何か新しい、気になることを追求するのもよし。信じるままに生きればいいじゃない。ほら、『考えるな、感じるんだ』でしょ？」

「いつも気になるんだが、その台詞は何なんだ」

「それ知らないのもあなたくらいよ。エンタメ映画ぐらい観なさい。ソファの上で、ボーイフレンドとくっつきながらね。あ、もうこんな時間。そろそろ学校行かないと」

んじゃ、まったねー、と脳天気な声を出すと、そこでエレーナは唐突にビデオチャットを切った。昔と変わらず自由な人間である。一方的に放

り出された伊吹は、この胸の内のもやもやをどこへ持っていったらよいか分からず、一人椅子の上で悶々としていた。

——物理学以外に、気になること？

そう言われても、小学校高学年ぐらいから、数学と理論物理以外に興味のあることなんて特になかった。趣味といたら新型のデジタル機器をいじるくらいで、それもこんな山奥の町ではままならない。まして恋愛なんて、一度もしたことがなかった。何の興味もない。男子なんて、どれもこれもサルにしか見えない。いや、かわいげのある分、サルの方が数段マシだ。

そうして椅子の上であぐらを掻いて腕を組み、伊吹が首を傾げて考え込んでいると、フツと妙な記憶が頭の中をよぎった。

三ヶ月前、暗い洞穴の中で見た、あの奇怪な腕の姿だった。

——気になること。

あの時、腕は確かに社から消えていた。

「お姉ちゃん、お風呂空いたよー！」

部屋の外から、紅葉の元気な声が響いてくる。

そこで伊吹は頭を振って、椅子から立ち上がった。

冗談じゃない。仮にも自分は科学者なのだ。何の理由もなしに物質が消滅するわけがない。あれはただの影を、先入観で見間違えただけのこと。

そんなものをいつまでも気にしているなんて、恥じるべき事だ。こんなことでは、明日からの吉野たちとの調べ物でも負けかねない。そうだ。いい機会だから、完膚無きまでに吉野の夢見がちな考えを否定してやろう、と思う。

ふう、と深く息を吐くと、伊吹は部屋を出て、風呂へ向かって歩いていた。

4.

その夜——。

誰もが寝静まった頃。

遙か遠く、山の方角から、

何か人間の知らぬモノの啼く声が聞こえた。  
大きな大きな何か、誰かを呼ぶように、怪しく妖しく哭いている。  
深く、どこか懐かしい声は、山に、川に、町に、響き渡る。  
けれど誰も、気づいていない。

それに応ずるように、その時刻。  
黒く歪んだ異形のモノたちが、夜の町を蠢いていた。  
けれど誰も、気づいていない。

時を経て、見えるべきものが見えなくなり、  
聞こえるべきものが聞こえなくなった人間には、  
何も気づくことが出来ないのだ。

伊吹はまどろみの中、それらを耳にする。  
夢の中で、その声を微かに聞く。  
けれど、伊吹は目覚めなかった。  
そして、翌朝起きたときには、すっかり忘れてしまっていた。

明くる日から、全ては始まる。